

Jitāri と Mokṣākaragupta

白 崎 顕 成

後期仏教資料の中で仏教 4 学派の教義を扱ったものに、Āryadeva 作と伝えられている Jñānasārasamuccaya (山口益, 中観仏教論攷, pp. 265-341), それに対する Bodhibhadra の註釈 (Jñānasārasamuccayanibandhana, 東北 3852, 北京 5252), Jitāri の Sugatamatavibhaṅgakārikā (東北 3899=4547, 北京 5296=5461=5867), それに対する自註 (Sugatamatavibhaṅgabhāṣya, 東北 3900, 北京 5868), Mokṣākaragupta の Tarkabhāṣā の最後の部分等があるが, この内, 今ここでは, Mokṣākaragupta の Tarkabhāṣā は, Jitāri に基づいていると云う事を指摘したい。そのために, 以下, それぞれの著作の時代, 作品について述べる。

ところで, この 3 著作の時代であるが, Āryadeva 作と伝えられている Jñānasārasamuccaya (以下 JSS. と略) が一番古く, 次に Jitāri が JSS. (山口本) の 21~28 偈を取り出し, Sugatamatavibhaṅgakārikā (以下, SVK. と略) と云うタイトルをつけ, それに自註をつけたと思われる。そして Tibet の伝承 (The Blue Annals. Part I. pp. 243~244) に従うならば, Jitāri と相前後する頃に, Bodhibhadra によって JSS. の註釈が書かれ, 次いで Mokṣākaragupta が Jitāri の SBK. の註釈をもとに, Tarkabhāṣā で 4 学派の教義をまとめたと考えられる。

次に Jitāri と Mokṣākaragupta の年代であるが, Jitāri は Ratnakīrti の Pramāṇāntarbhāvaprakaraṇa に引用されているから, 少なくとも Ratnakīrti より以前の人か, 或は同時代人であると考えられる。この点に関して云うならば, Jitāri は Mokṣākaragupta より以前の人と考えられるから, 三者の時代は, Jitāri と Bodhibhadra はほぼ同時代人, それに続く時代に, Mokṣākaragupta が続くと考えられるのである。

次に, 個々の著作に関してであるが, JSS. 21~28 偈と SVK. は全く同一のものであり, Tarkabhāṣā では, JSS. 21~28 偈の半数近くが引用されている。

所で, Tarkabhāṣā が, SVK. の註釈に基づいていることを指摘するために, 以下において一致する点をあげる。

尚 Tarkabhāṣā は H. R. Rangaswami Iyengar, ed., Tarkabhāṣā and Vādas-thāna, Mysore, 1952 (M 本) の頁数を, SVK. の註釈 (SVBh.) の頁数は北京版の

それを示す。

〈Sautrāntika の教義に関して〉

- ① TBh. p. 64. ll. 3-8. SVBh. 321a⁸~321b⁸.
 ② TBh. p. 65. ll. 14-18. SVBh. 321b⁵~321b⁷.

〈Yogācāra の教義に関して〉¹⁾

- ③ TBh. p. 64. ll. 11-14. (經) SVBh. 323a²~323a³.
 ④ TBh. p. 66. ll. 1-4. (經) SVBh. 323a⁴~323a⁵.
 ⑤ TBh. p. 66. ll. 5-6. (經) SVBh. 323b^{2,2)}
 ⑥ TBh. p. 66. ll. 6-8. (經) SVBh. 323b²~323b³.
 ⑦ TBh. p. 66. ll. 10-13. (經) SVBh. 323b³~323b⁵.
 ⑧ TBh. p. 66. ll. 15-16. (經) SVBh. 323b⁵~323b^{6,3)}
 ⑨ TBh. p. 67. ll. 2-12. SVBh. 323b⁸~324a⁴.
 ⑩ TBh. p. 67. ll. 13-18. SVBh. 324a⁴~324a^{5,4)}
 ⑪ TBh. p. 67. l. 18~p. 68. l. 6. SVBh. 324a⁶~324a⁸.
 ⑫ TBh. p. 68. l. 6. SVBh. 324b¹.
 ⑬ TBh. p. 68. ll. 8-11. SVBh. 324b³~324b⁴.
 ⑭ TBh. p. 68. l. 14~p. 69. l. 2. SVBh. 324b⁷~325a².
 ⑮ TBh. p. 69. ll. 5-19. SVBh. 330a⁸~330b⁵.

〈Mādhyamika の教義に関して〉

- ⑯ TBh. p. 70. l. 14~p. 71. l. 8. SVBh. 331a²~331b¹.

以上は両者が対応する部分であるが、これによつて、Mokṣākaragupta は仏教の4学派を論述するに際して、如何に Jitāri に負う所大であつたかを指摘出来たと思ふ。

しかし、両者の相違点も、即ち両者の立場の相違もこの資料によつて明確にすることが出来る。

Jitāri は、Vasubandhu, Sthiramati, Śāntirakṣita, Ratnākaraśānti 等の無相唯識派~中観瑜伽綜合学派に属する人と考えられる。と云うのは、Jitāri は、SVK. の

1) この分類は、SVK. の註釈に従つた。TBh. (經) の意味は、TBh. では Sautrāntika の教義としてあつかわれていることを意味する。

2) 文章そのものが対応するわけではないが、内容が対応する。

3) Hetubinduṭīkā of Bhaṭṭa Arcaṭa; GOS CXIII, p. 106. ll. 25-26.

4) TBh. では散文で書かれているが、内容は対応する。TS. 1989. 1990 偈。

註釈において、有相唯識派を批判しているが、無相唯識派を批判していない。それは両者の立場が究極的には非常に近かつたことが、その原因であると考えられる。

一方、Mokṣākarāgupta は、Dignāga, Dharmakīrti, Prajñākarāgupta, Jñānaśrīmitra, Ratnakīrti 等の有相唯識派～経量瑜伽総合学派に属すると思われる。

それは、以下の2点によつて明確に出来る。

第一に、Mokṣākarāgupta は、Tarkabhāṣā では、Prajñākarāgupta を2回引用することによつて、Jitāri との立場の相違を明確にしている。

第二に、Jitāri の SVK. の註釈では Yogācāra の教義で述べられていたもの③～⑧が、Mokṣākarāgupta では Sautrāntika の教義の問題として扱われ、4学派の教義の内では、Sautrāntika の教義の部分が一番長くなっている。さらに、Jitāri は Śāntirakṣita の TS.⁵⁾ 1989. 1990 偈を引用しているのに対して、Mokṣākarāgupta は、それを散文に改めている点などがそれである。

ところで、Mokṣākarāgupta は、仏教4学派の問題だけではなく、論理学の問題に関しても、Jitāri にもとづいていると云う事実を、今は例を一つあげながら説明したい。

Mokṣākarāgupta は、Tarkabhāṣā の推理論の中で、否定的推理の分類に関して、16種類を挙げている。この分類は、Dharmakīrti 以来3種 [Hetubindu], 4種 [Pramāṇavārtika], 11種 [Nyāyabindu] 等さまざまに分類されて来たわけであるが、Jitāri は Bālāvātārātarka (東北 4263. 北京 5760) で16種類に分類している。ところでこの16種類の分類は、Dharmottarapradīpa においても見られるものである。

そこで、この2者を比較してみるならば、Jitāri と Mokṣākarāgupta は16種類の分類の順序・記述内容は完全に一致する。今両者の対応部分の頁数を挙げるならば以下の如くである。

Bālāvātārātarka (北京版,) 353b⁵～355a¹. Tarkabhāṣā, p. 31. l. 10～p. 33. l. 16.
従つて、Mokṣākarāgupta が否定的推理の記述に際して、Jitāri にもとづいて

5) Tattvasaṃgraha with the com. (Pañjikā) of Kamalaśīla, GOS. XXXI.
saṃyuktaṃ dūradeśasthaṃ nairantaryavyavasthitaṃ/
ekāṅvabhīmukhaṃ rūpaṃ yad aṅor madhyavarttinaḥ// 1989.
aṅvantarābhimukhyena tad eva yadi kalpyate/
pracayo bhūddharādīnāṃ evaṃ sati na yujyate// 1900.

いる事は、明白である。

この他、論理学の記述に際して、両者が対応する部分は多々あるが、紙数の都合上、次の点だけを指摘するだけに止める。

Jiāri は、直接知覚の内、意知覚を、Hetutattvopadeśa に於ては認めていない。しかし Bālāvatāratarka に於ては認めている。何故に、同一著者たる Jitāri が、このような態度をとつたかは、今ここでは詳しく述べる事をさしひかえるが両者の内、Bālāvatāratarka は、伝統的立場、即ち Nyāyabindu に基づいて著作されたと云う事は、その内容から明白であるから、この意知覚を認めたものと思われる。これに反して、Hetutattvopadeśa は、Nyāyapraveśa からの引用が多く見られるとしても、比較的 Jitāri 個人の立場が表明されている様に思われる。従つて意知覚を認めていないと考えるのであるが、Tarkabhāṣā においても、意知覚は積極的には記述されていない⁶⁾。このあたりに、両者の関係を暗示させるものがある様に思われるが、両者についての個々の問題は、機会をあらためて述べたい。

6) この点に関しては、すでに梶山雄一博士の指摘がある。「論理のことば」梶山雄一訳注、中公文庫、訳注、p. 145. の注 33 がそれである。